

研究結果報告書

日中近世儒学思想の研究：共通の基盤を構築する試み

所属：武漢大学 国学院
役職：専任講師
氏名：陳 曉傑

本研究は日中近世儒学を同一の土俵で検討するため、二つの関連テーマを設定していた。それは超越的「天」（前篇）と「人倫」（後篇）をめぐる研究である。

近世儒学の人間および「人倫」のすべての根拠は超越者である「天」にあるとされてきた。朱熹は、天地に「心」があることを認め、主に「天は万物を生じる」という枠組みにおいて自らの論旨を展開していた。ところで、朱子学を執拗なほど批判した荻生徂徠は、「天には心がある」と反論しながら、その「天心」は結局「生々」する意志と理解されている。そうすると、両者における「天」の思想には、実は深い類似性があると考えられる。

一方、本研究の後篇は「人倫」に着目し、次の二点をめぐって考察を加えた。一つは、「男一女」というテーゼに基づき、日本の儒者の女性論について検討した。これについては、多くの女訓書を編み出した貝原益軒を中心として検討した。主に武家の女性を対象とする中江藤樹の「鑑草」とは違って、貝原益軒の「教女子法」が通俗性があるため広く受け入れられた。庶民だからこそ男女の差別は支配階層より緩やかであるという江戸時代でも近世中国でも見られる歴史的現象は、貝原益軒の女性論とは大きなギャップがある。専ら「和・順」を重んじる彼の力点は結局近世中国の儒者たち（呂坤など）と同じく、儒教伝統の男女論に基づいて現実を是正する方向である。

二つは、前近代の日本と中国を理解するために重要となる「君主」および「君一臣」という人間関係について検討した。本研究では中江藤樹の門人である熊沢蕃山を取り上げた。熊沢蕃山は周代の「天子」を江戸幕府の将軍を当てながら、武士＝為政者における階層的な秩序自体が政治的能力に基づかねばならないと主張し、また公武各別論を唱え、権威代謝の説を述べている。熊沢蕃山の君主論はそのため彼の師匠である中江藤樹と大きな違いがあり、江戸時代中期までの儒者の中には最も特別な思索だと思われる。

研究成果の公表について

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「朱熹與荻生徂徠之思想比較--以“天心”為線索」
東亞朱子學國際學術研討會 2015年12月26日

陳曉傑
復旦大學

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)